

Title	印度經濟學の成立とその方向
Author(s)	島, 恭彦
Citation	東亞經濟論叢 (1942), 2(2): 486-508
Issue Date	1942-05
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/128702">http://hdl.handle.net/2433/128702</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

京都市帝國大學經濟學部內 東亞經濟研究所

# 東亞經濟叢論

第貳卷 第貳號

昭和十七年五月

東亞廣域經濟の爲替理論……………經濟學博士 谷口吉彦

貧樂生活及思想……………商學士 大谷孝太郎

漢志にあらはれたる貨幣思想……………經濟學士 穗積文雄

支那銀行法規考……………經濟學士 德永清行

滿洲國興農合作社の組織……………經濟學士 大上末廣

印度經濟學の成立とその方向……………經濟學士 島恭彦

支那女子紡績労働者創出過程の特質……………經濟學士 岡部利良

中晚唐時代に於ける燉煌地方  
佛教寺院の礎礎經營に就きて……………文學博士 那波利貞

附錄 南方文獻目錄

（禁轉載）

有斐閣發賣

## 印度經濟學の成立とその方向

島 恭 彦

### 一 英國經濟學と印度經濟學

十九世紀に於て獨乙經濟が自己の後進性を自覺し、英國的段階にまで到達しようとした時に、その努力がイデオロギー的には經濟學の國民的體系となり獨乙經濟學となつて現れたのは周知の事實である。リスト等があくまで英國經濟を目標におき、獨乙經濟を其處に達するまでの過渡的段階とした點において、彼の經濟學が果して國民的自覺に徹してゐたかどうかの問題は残るけれども、とにかく其後の獨乙經濟學が英國經濟學に對して獨特の性格を持つてゐた事實に疑ひない。斯様に民族的自覺が國民主義的經濟學を生み、又國民的經濟學が民族經濟の自主性を反映すると云つた様な事情は必ずしも十九世紀の獨乙に限るまい。「それ自體世界であつた」英國の經濟及び經濟學から東亞の諸民族が次第に解放されて行かうとする現代に於いても同様な事情が見られるのではなからうか。そしてこゝに例へば日本經濟學、印度經濟學、支那經濟學と云つた様な一聯の民族的經濟學の成立を期待してもよさそうである。

勿論十九世紀の獨乙經濟學と現代の東亞諸民族の經濟學、特にこゝに問題にしようとする印度經濟學との間に

單純な類似を考へる事は十九世紀の獨乙經濟と現代の印度經濟との類似を見出さうとするのと同様に誤謬である。十九世紀の獨乙經濟學は英國的資本主義經濟を目標におきつゝ自己の後進性を自覺した。現代の印度經濟學にもさう云つた後進性の自覺と前進の欲求が含まれてゐるけれども、それは例へばリスト經濟學に見られるものと單純に同一視する事は出来ない。更に現代印度の英國に對する後進性と隸屬性とは十九世紀の獨乙の英國に對する關係と比較にならない。先づ何よりも明かな事は印度は英國の植民地であると云ふ事、そしてこの所謂植民地的性格が印度の産業、金融、貿易其他印度經濟のあらゆる側面に濃厚に現れてゐる事である。そればかりではなく、英國に年々多數の留學生を送り英國的教養を身につけてゐる印度人の觀念そのものが多分に植民地的性格をおびてゐる。一時はスミス經濟學に支配されたとは云へ、十九世紀の初頭既に自らの大學を待ち其處の講壇で獨特のカメラリストイックを育てあげて來た獨乙と異なる。斯様な事實を念頭においてみると現代の印度に果して民族的經濟學の成立する餘地ありや疑はしい。併し乍らそれにも拘らず第一次歐洲大戰の前後より印度の經濟學者の間で「印度經濟學」の主張が生れて來た事は、およそその當時より印度經濟がある程度の自主性を獲得した事實の一指標でもあり、又それ故にこの印度經濟學の方向こそ東亞共榮圈の指導者日本と印度との關係がいよ／＼緊密の度を加へつゝある現代に於て重大な關心を呼びおこす問題でなくてはならない。

「印度經濟學」はまづ印度人自身の經濟學でなければならぬのであらう。けれども英國の印度に對する支配的關係よりして、さう云ふ民族的經濟學が起る前にまづ英國人の印度經濟學があつた。事實 Indian Economics と云ふ言葉は Economics of India と云ふ様な意味に於てゼボンスやケレンズ等の近代英國經濟學者によつて用

ひられてゐる。其は勿論民族的經濟學ではなく、印度の支配者の立場よりする印度經濟の研究であり、其處で何か「民族性」と云ふ事が問題になつてゐるとすれば、それは單に印度經濟の後進性を示す諸特徴を意味するに過ぎないのである。併しまづ斯様な意味の印度經濟學、換言すれば英國經濟學者の印度經濟觀を見ておく事は、印度人の民族的經濟學を理解するための一要件である。何んとなれば、後者は前者への對立關係に於てはじめてその性格を鮮明にする事が出来るからである。

それでは英國經濟學は印度をどう見てゐたか。一般に英國の古典經濟學には印度のみならず東洋社會をその内部より深く把握する態度に缺けてゐた。印度其他東洋の諸國は云はゞその外部より商人や投資家の眼を以て見られ、商品流通や資本投下によつて觸れられた部分のみが問題になる。古典學派が自由通商を東洋諸國に奨めたのは、彼等が自由貿易なるものをその基礎から切離して抽象的にしか理解してゐなかつたためであり、また同時に東洋諸民族の經濟が個性的にはつきりつかまれてゐなかつたためであらう。斯様な東洋諸國の表面的な理解は古典派の經濟學者に固有のものではなく、現代の英國經濟學者にも見られるものである。例へば廿世紀に入つてから印度の通貨、金融制度の研究が壓倒的に多いが、其はこれらの制度が英本國よりする印度の搾取と支配の最も有効な手段だからであり、又同時に他の經濟諸制度に比して地方的差違少く移植的部分多く、外部より研究しやすいためであらう。<sup>1)</sup>乍併かう云ふ理由と視角からする印度經濟の研究は到底その中核の把握にまで達しない事は言ふまでもない。例へばケーンズの「印度通貨及金融論」を見よう。其中で印度の所謂金爲替本位制が辯護賞讃されてゐる。この制度に於ては通貨は銀貨及び紙幣で金貨は原則として國內に流通せず、英本國に爲替準備

1) Perrot, Economic Journal. Vol. 18. p. 625.

資金として保有され、この準備に對して一定の相場で賣渡された金爲替手形を基礎に通貨の對外價値の安定をはかるのであるが、これは金の國際的節約と利用の形であり、金本位制の最も進歩せるものであると言ふのである。乍併實はこの制度は印度經濟の植民地的性格を現はすものであり、英本國の一方面的な通商上の利益のために利用され、又ロンドン金融市場に保有されてゐる準備金は英本國の流用するところとなつてゐる。さうであればこそ印度の民族的經濟學者はこの金が印度自身の産業開發に利用される事を望んでゐるのである。ケーンズの金爲替本位制に對する讚辭はこの制度を印度經濟の植民地的性格の側より把握しないで、抽象的、純技術的に理解した事に基いてゐる。それは恰も古典派經濟學者の自由貿易萬能論と同様な誤謬である。

勿論英國の經濟學者が東洋諸國の經濟の性格的相違を何等理解してゐなかつたと云ふことは言ひ過ぎである。彼等の自由貿易論の背後にある國際分業の説によれば、互に通商する國々は例へば一方が工業、他方が農業と云ふ風にそれ／＼異つた産業を持つてゐなければならない。英國と印度との貿易であれば當然前者は「工業國」であり後者は「農業國」である。斯様に兩國の産業の相違は認められてゐるが、この「工業國」と「農業國」とは互に平等な資格に於て同等な利益を獲得し合ふと云ふフィクションがこの理論の中に含まれてゐる。乍併「農業國」と「工業國」とは激しい國際間の競争裡にあつて到底平等な地位を保ち得るものでなく、必然的に前者の後者に對する隸屬關係が深まつて行く。其故に第一次大戰以後東洋の「農業國」に於て工業化運動が熾烈になつて來たのである。併しこれは當然「世界の工場」をもつて自任してゐた英國の地位を脅かすものでなければならぬ。こゝに再び古めかしい國際分業論と比較生産費説が英國經濟學者の側から提出されるのである。

2) 矢内原忠雄著、帝國主義下の印度。

3) Wadia & Joshi, The Wealth of India, p. 395.

吾々はこゝで再びケーンズを引合ひに出さう。彼によれば農業國印度が工業化せんとして其の民族資本を相對的利益の多きい農業より利益の少い工業へ移動させると云ふ事は印度經濟繁榮の大きな障害になるだらう。印度が英國と接觸して以來産業資本主義が印度の發展を保證すると云ふ様な事を愛國的情熱にもえる民衆に信じ込ませたのは不幸な事であつた。印度民衆の眼にはボンベイやカンカッタの工場統計があまり大きく映りすぎてゐる。そして彼等は是等の工場の中に何か印度民族の尊嚴を確保する様な非經濟的利益が含まれてゐるものと信じてゐる。いまケーンズの理論が正しいか、印度民衆の信念が正しいかを詮索する事は止めよう。たゞケーンズの主張は印度の進歩と工業化に關するあまりに樂觀的な見解に對しては多少の批判的意義を持ち得るが、それはあくまでかのフリードリッヒ・リストの所謂「生産力の理論」に對する「交換價値の理論」である事に注意されねばならない。そしてこの「交換價値の理論」は如何に表面的な價格現象に固執して民族經濟の内面的な欲求を葬りさるものであるか次のケーンズの主張を見るがよい。「……交通の改善は諸民族の間にある程度の特種化を引きおこした。それ故にもし印度の風土的條件と印度民衆の生活態度や慣習に注意が拂はれるならば、工業製品を自分で生産するために民族資本と農民とを地方の農場からボンベイに移すよりも、印度がいま獲得してゐる様な工業製品の多くを自國の原始生産物と交換に西洋から手に入れる事によつて一層多くの富を獲得するだらうと云ふ事は容易に信ずる事が出來よう。印度の輸出品の價格が輸入品の價格よりもずつと早く騰貴してゐると云ふ事實は、印度にとつてますます有利な比率で斯様な交換をなさしめる或る氣運が動き始めた事を示してゐる様に思はれる。又工業國がもう相對的利益の最高點に到達してしまつて、將來は土地の肥沃さと廣さの中に長所を持

つてゐる國々に有利な様に貿易尻が動いて行くかも知れないと云ふ事はあり得ない事ではない。」<sup>4)</sup> (傍點、筆者)  
英國と印度との間に「工業國」と「農業國」と云ふ皮相な區別以上のものを見ず、而も交換價值上の「利益」以外のものを考へようとしなない英國經濟學の支配者的視野の限界はこゝで明かにされてゐる。

## 二 印度經濟學の成立

以上で私はケーンズに現代英國經濟學を代表させて、彼の印度經濟學を考察したが、それは印度支配の經濟學以外の何物でもない事が明かになつた。吾々がこれから取上ようとする固有の民族的印度經濟學は勿論この印度支配の經濟學と對抗的關係において考へられねばならない。ところで吾々はこゝで印度經濟學なるものが「方法的」に可能であるかどうかと云ふ様な方向に論議を持つて行きたくない。それよりも先づ印度社會、印度民族の中に經濟學的思惟と思索をなさしめる地盤があるかどうかを知つておく事が先決問題である。

民衆の大半が農業や幼稚な手工業に従事し上層部は宗教的瞑想にふけつてゐた古い印度には經濟學的思惟の割込む餘地はない。印度民衆の經濟觀念を調査した Perrott の報告によれば、教養のある階級はすべて社會の舊い慣習によつて經濟活動にたづさはる事をさせ、これに關係したのはたゞ穀物の賣買や貨幣の貸付を營んで來た Marwari の階級のみであつたと云ふ。併しこの金貸業者は貨幣資本の貸付業務には精通してゐても、貨幣に関する一般的知識に缺け、例へば一八九三年銀の自由鑄造が停止されてから通貨に起つた變化の意義を解しなかつた。又金銀の素材價值に執着してゐる民衆はルピー貨が銀の價值より離れて法定貨幣として流通し始めた(一八

4) J. M. Keynes, Economic Journal, Vol. 21, p. 427.



三五年)事實を曲解して、モガール皇帝の鑄造した純良な銀貨は時代を経るほど不良になつて行くと云ふ頑固な迷信をいだいてゐたと云ふ<sup>5)</sup>。これらの實例は印度の民衆が自國の經濟制度に起りつゝある新しい變化に無智であつた事を物語つてゐる。

斯様な状態の中に新な經濟的乃至經濟學的知識を持ち込んだものは誰か。ノールス等の言ふ様に「歴史及宗教に甚き驚くべく非物質的なるこの國民に經濟的感覚を喚起」したものは、まづ英國であり、英國によつて印度に移植された資本主義であつたと云へよう<sup>6)</sup>。例へば先に述べた印度通貨の變化について見れば、通貨の素材價值について神秘的觀念を持ちこれを退藏してゐた階級も、資本家的産業の勃興と共に貨幣資本として活潑に運用し始めるであらう。ザミンダール(地主)は退藏する代りに貨幣を貸付け政府の公債を買ひ、鐵道に投資するであらうし、富裕なライヤット(農民)は土地を買ひ、彼の貧しい隣人に貸付けるだらう<sup>7)</sup>。かくして印度民衆の間に新しい經濟的知識が植えつけられる。それと同時に印度の知識階級の中に英國の經濟學が輸入される。

吾々はかくて印度人の經濟學的知識をまづ移植されたものと見るのであるが、併乍らさうである限りは其處に何等民族的經濟學の發生する地盤はない。經濟學が眞に印度民族のものとなり民族的自覺によつて充實される要件として、吾々は第一次大戰前後より發展する印度の民族的産業資本と國民運動を考へねばならないであらう。十九世紀の終りより生長する印度紡績資本、國民運動の中心勢力をなす國民會議派の成立、英國品のポイコットと印度の自給經濟を目指すスワデン運動の展開、大戰後の關稅自主權の獲得等の形で印度經濟は一つの自主的な經濟單位として外部に向つて語り主張しはじめた。そしてこの運動の背後にある資本家、地主、手工業者、工場

5) Perrott, Economic Journal. Vol. 18.

6) Knowles, The Economic Development of British Overseas Empire. p. 297.

7) Perrott, ibid.

労働者、知識階級等の雑多な欲求と感情が印度經濟學の中に反映するのであるが、吾々はこの場合印度の民族的産業資本の意欲が特に強く前面に出て来るのを知るであらう。

印度の國民運動及び經濟的自覺と民族的印度經濟學との關係は決して私の單なる想像ではない。現に印度の民族運動の指導者、民族資本の自由の主張者にして同時に印度經濟學の建設者であつた數名の人々を數へる事が出来るからである。例へば Ranade, Mahadev Govind (1842—1901) 彼は印度國民會議派の創設者の一人で、早婚、カスト制度の廢止等の社會改良的方面に活躍すると同時に印度の傳統保持にも努めた。彼の印度工業及び農業に關する著書は現代の印度經濟學にも尙指導的影響を持つてゐる。或はまた Gokhale, Gopal Krishna (1868—1915) 彼は廿世紀の始め國民會議の議長を任め、資本家的ラベラルの傾向を持つてゐたが、印度の植民地的財政の痛烈な批判者であり、かつてプーナ (Poona) のフアガソン・カレッヂの教授として數學、歴史、經濟學を講じてゐた。後に問題にしようとする Kale は同じカレッヂに任めた事あり、Gokhale の傳記の著者で、現代印度に於ける彼の後繼者とも見る事が出来る。

斯様に印度經濟學が民族運動に接近し、それと絡みあつて發展したと云ふ事情は經濟學體系の整備にとつて必ずしも有利ではあるまい。ある批評家が指摘した通り、印度經濟學者の強い政治的感情は彼等の著書をジャーナリズムやプロパガンダにまで墮落させる原因になつてゐるとも言へよう。事實印度經濟學の多くのものは眞に科學的内容をもつ經濟學よりへだたる事遠いのである。乍併凡そ民族的感情を抜きにした印度經濟學なるものは、實は印度經濟學であるよりも、むしろ印度の英國に對する隸屬の現状より考へて英國經濟學の縮少再生産以上の

8) Seligman's Encyclopaedia of Social Science.

9) Thatcher, Economic Journal Vol. 35.

ものになり得ないだらう。英國經濟學の注文にびつたりあつた例へばフインドレー・シツラスの如き經濟學者が印度に少いと云ふ事は必ずしも印度經濟學の前途を暗くするものではないであらう。

而も現代の印度經濟學はそのこと／＼が政治の喧噪の中から生れつゝあるものではなく、經濟學の正常な發達のための人的、物的條件が次第に整つて來てゐる事實に注意しなくてはならない。かつてゼボンスの印度からの通信によると印度の大學では經濟學の講座が次第に人氣を集めてゐるとの事である。現在では印度に十二の大學があり、其等の大學に於て聽講生の數から云へば經濟學は英語（大抵の大學に於ては必修課目とされてゐる）、歴史に次いでゐる。又大學や専門學校の經濟學、社會學の教授は約一四〇名に及び、英國や米國の派遣教授を除いて約七八名の印度人の經濟學者を數へる事が出来る。印度の大學の圖書館も亦最近十年間に大いに充實し、英國の新しい地方の大學に比敵するものがある。更に印度經濟學協會も設立せられ、大學の經濟學部と共同で經濟學に關する定期刊行物 (The Indian Journal of Economics) を出してゐる。

そればかりではなく、あらゆる方面に印度經濟に關する研究熱が高まつてゐる事に注意されねばならない。例へば最近若い經濟學徒の間に印度經濟の實態調査をしようとする強い運動の如き、幾組かの學生が其の近邊の紡績、製粉、製紙、製糖工場等を訪ね、企業家と協力して資料を集め、又地方の農村へ旅行して農業の研究をなし手工業の現存してゐるものや衰退しつゝあるものを見學する。他の方面に於ては經濟上の問題が印度の中央政府や地方政府の注意を惹いてゐる。最近の議會で印度人の代議士が政府は全國的な經濟調査をなすべき事を要求した。この要求は印度内部の經濟事情が複雑多岐であるために實現困難であるが、地方諸州の政府の中には相當の

成果を収めてゐるものがある。例へばボンベイ州政府の労働局がフィンドレー・シッラスの指導の下に立派な經濟上の仕事を成遂げた如き、パンジャツプの政府が經濟調査機關を設けて生計費騰貴の調査や村落生活の詳細な研究を實行した如きである。<sup>10)</sup>

以上私はゼボンスの報告に基いて印度に於ける經濟學研究の現状を紹介した。吾々は斯様な地盤の上に於てこそ印度經濟學の成立を期待する事が出来る。そして印度經濟學が英國經濟學の單なる「移植」ではなく、既に印度民族のものになりつゝある事實を知る事が出来る。

### 三 印度經濟學の合理主義的傾向

吾々は既に印度經濟學の地盤として印度民族資本の擡頭と云ふ事實を指摘しておいた。併し民族的産業資本の成長のためには其の障害となる様な一切の印度の舊秩序、例へば労働力の集中と移動をさまたげるカスト制度、國內市場の擴大を制約する地方的慣習風俗の多様性、更に資本家的、合理的精神の發達を抑へる印度民族特有の宗教的、非現世的傾向等々が排除されなければならない。其故に民族資本の自覺を深くその經濟學の體系に織込んで印度經濟學の先覺者達は又同時に社會改良家でもあつたのだ。

現代の印度にはヨーロッパ諸國に見られない舊社會制度の強い桎梏が存在する。其故に現代の印度經濟學も亦單に英國流の資本主義的經濟理論に終始する事は出来ない。それは必然的に經濟と社會、經濟と倫理等の關係を問題にする歴史主義的傾向を持つてゐる。乍併その歴史主義とは進歩主義的意慾に貫かれたものであり、古い社

10) S. Jevons, Notes from India, Economic Journal. Vol. 35. p. 148—150.

會と倫理との戦ひに於て經濟の勝利を確信する樂觀主義である。其故にまた其は印度經濟の西歐經濟への接近を期待し、民族的經濟學にして印度の傳統と民族性を否定する様な皮肉な結果になる。併し斯様な傾向も亦後進國印度の民族資本の立場に立つ限り避けがたい事であらう。

私はこの一例として Kale, Vaman Govind. の印度經濟學 (Introduction to the Study of Indian Economics) をあげよう。彼も亦倫理に對する經濟の優位を信するものである。いやむしる經濟の徹底的優越を信するが故に倫理と經濟、精神と物質との間に何等の矛盾をも感じない。彼は近代の物質主義が人間性を墮落させたと言ふ様な懐古主義者の説を否定するのである。「斯様な倫理と經濟の間の相克は實在しない。物質的狀態を改善しようとする意欲や一段と高い社會的地位に昇らうとする野心や現世的財貨を所有するための争ひは單に近代に又近代文明に特異な様相ではない。いやむしる近時に於ける人間性の進歩は、人間がいよく増々自然力を征服し、これを人間の福祉の増進のために利用したと云ふ事實の中に見られる。」<sup>11)</sup> 斯様に信するが故に、Kale は近代の資本主義經濟に背を向け過去に黄金時代を求めると云つた様な傾向に對して強く反對する。實際さやうな見地からは慾望も少くその慾望満足に殆んど努力をしなかつた原始人が最も幸福であり徳性の高い人間であつたと云はねばならないのである。其故に彼の結論は「物的富は唯一の福祉の源泉ではないけれども、それは決して輕んずべきものではない。けだしそれは又人間を一そう高い水準に向上させる事に貢獻するからである。」<sup>12)</sup>

さて斯様な見解からして Kale は又西洋の物質主義と印度の精神主義とを對立させる考へ方に抗議する。この二つの特徴は西歐文化と印度文化の本質的な相違として皮相な觀察者の眼に映するのである。併し乍ら印度の

11) Kale, Indian Economics. p. 17.

12) Kale, *ibid.* p. 21.

精神主義が強調される時、Kale にとって其は印度民族に對する讚辭ではなくて侮辱であると考へられる。けだしさう云ふ言葉を以て、現代印度の貧しい事や農業がその主要な産業である事や人民の欲望が限られてゐる事等が、印度民族の宗教的、冥想的傾向、ヨーロッパ人の戰鬪的性格に比して印度人の性格的な弱さに歸せられるからである。これは結局印度民族が先天的に劣等な民族として近代資本主義經濟の環境に對する適應性をもたぬ事を意味する。併し印度民族が今まで非現世的な生活のみを送つたと云ふのは事實ではない。印度民族の歴史は過去の印度が精神文化の方面に劣らず現世的財貨の方面に富んでゐたと云ふ事實を物語り、印度民族と雖も現世的物質的快樂に對して健全な意慾を持つてゐた事を證明する。

或者は又現世的富を敵視するヒンズー教の教理を以て印度民族の非現世的傾向の事實を例證しようとする。併しさう云へば歐洲のキリスト教についても、この教理に支配された中世の歐洲人にも同じような事が言はれよう。ヒンズー教が禁慾主義的理想を持つてゐるのは事實であるが、これはたゞ理想として高く掲げられただけで、實はヒンズー教ほど現世に對して妥協的な融通のきく宗教はなかつたのである。ヒンズー教は決して過去の印度の現世的經濟的發展を妨害しなかつた。過去に於て印度が優秀な技術と工藝とを持ち、強大な帝國が興り、繁榮せる商業が遠くヨーロッパからこの國の海岸へ多數の商人を引きつけた事はこの事實を證明する。十八世紀の技術革命や工場工業の開始せられる以前に於てはヨーロッパの經濟的狀態は印度に比して秀れてゐると云ふ事は決してなかつた。その時期以後に於ても印度の技術と工業とは英國の機械製品に頑強に抵抗する事が出來たのである。

問題は印度人がヒンズー教徒であるか否かと云ふ事にあるのではない。ヒンズー教徒でない印度の民衆が經濟的に無氣力であり、英國流の高い教養をうけた人間が生産に殆んど關與してゐない。他方で古い宗教の信奉者であり古い慣習の墨守者である Marwaris 出身の實業家が西洋流の銀行業、工業、商業の第一線に活躍してゐる。<sup>13)</sup> 要するに Kale によれば宗教や倫理は經濟の對立物でなく、經濟的現實の説明を宗教や倫理に持つて行く事は誤りである。それでは現代印度の經濟の停滞性は何に基くかと問へば、英國の植民地搾取と二、三の舊社會制度をあげる以外に統一的な説明は與へられない。Kale はたゞ印度の一部に見られる近代工業や大都市の目ざましい發展に注目して、印度經濟の沈滞は一つの社會經濟より他の社會經濟へ發展する經過の様相であり、將來は印度も亦ヨーロッパ諸國と同様な發展段階を辿るであらうと云ふ樂觀的な結論を引出すのみである。

Kale は又カスト制度についても同様な見解をいだいてゐる。成程この制度は現代の印度にも尙効力をもつてゐる。そして祖先傳來の職業から他の職業へ移る事を妨げてゐることの制度の拘束は經濟的浪費と能率の減退を意味し、勞働力の自由な移動を妨げてこの國の生産力に悪影響を及ぼすであらう。併し他面から考へればこの制度は經濟生活に對して絶對的な制約となつてゐるわけではない。近代經濟の壓力と生存のための鬭争の裡にカスト的偏見は次第に消滅して行くであらう。例へばヒンズー教徒の中の高い身分の者、ブラーマンが仕立屋や大工を始めたたり、製品に對する需要が減退して傳來の技術をふるうによしなき職人が少數の富者の美術的趣味を満足させるために働いてゐる等。又回教徒や他のヒンズー教徒でない者はもと／＼何等カスト制に妨げられずに自由にその時々々の經濟狀勢に適應する事が出来る。更にカスト制の最下位におかれた所謂「不可觸」の汚れた人民達は

13) Kale, *ibid.* p. 34.

高い身分の者を制約してゐる宗教的考慮から自由に極めて遠隔の地に、例へばセイロンやビルマやマレー聯邦等に出稼ぎする事が出来る。其故に印度の民族産業はこれらの人口の中から老大な労働人口の供給を受ける事が出来る。こゝでも Kale は又過去のヨーロッパにも職業の自由選擇を妨げる身分的制約のあつた事を指摘し、現代の印度は將にこの段階を經過しようとしてゐると斷定するのである。

斯様に擡頭する民族資本の將來に確信を持つてゐる Kale は當然また印度を古い農業國の状態におかうとする主張や印度の工業化を妨げようとする政策に對しても抗議しなければならぬ。確に最近の印度の狀態は農業人口の増加を示してゐる。これは古い手工業者の没落といよく多くの民衆が農業に依存しつゝある事實を示してゐるのである。併し斯様な事實を以て印度の農業、殊に海外市场に於て騰貴してゐる商業用作物の耕作が有利になつたためであると説明するならば其は大きな誤謬である。「これは吾々にとつて正しい説明とは思はれない。むしろ傳統的職業によつて生計を立てゝゐた手工業者や職人が外國工業の競争によつて彼等の祖先傳來の産業が衰退したために農耕に追ひ立てられたのである事が立證される。」<sup>14)</sup>棉や小麥やジュートに對する海外からの需要が増大し其等の農産物の値上りによつて一部の耕作者が利益を得てゐる事は確かである。併し印度の農民は英國の農業企業家と異なる。資本を缺乏經營上の知識に乏しい彼等は商業用作物の値上りに充分均霑する事なく、利益の大部分を地主や高利貸に吸ひ取られる。斯様に考へれば、農業上の利潤が高いために印度の民衆の多くが農業を營んでゐるのではなく、老大な人口が利益の少い農業に追ひたてられ人口過剰を來たし周期的に激烈な饑饉を引起してゐると云ふのが現状である。この現實に對して國際分業の理論から農業に専心する事が印度の利益であ

14) Kale, *ibid.* p 49.



るとか、民族性の見地から印度人には大工業を起す能力がないとか云ふのは誤りである。現在では印度民族の工業上の能力と技術とは殆んど忘れられてゐるが、過去の印度は工業生産の方面で輝しい成果を収めたのである。この民族性に基いて印度工業の再生を計らねばならない。「印度を農業國の状態におく事は國民の進歩をあらゆる方面に於て阻害する。多様な産業の存在、殊に高い知性と徳性の發揮を必要とする工業の存在は國民の健全な發達にとつて必要である。」<sup>15)</sup>Kaleは印度の農業と工業の均衡を希望してゐるが、工業化に重點をおいてゐる事は確かである。

彼は又印度の工業化の主張と並行して印度經濟に於ける生産問題の重要性を強調する。印度に於ける富の分配についても改善すべき餘地は多いけれども、これは結局印度の農業及び工業生産力が低度であると云ふ事實にかゝつてゐる。印度民衆の貧困はヨーロッパに於ける産業資本主義の結果生れた社會問題と質を異にし多分に前資本主義的特質を持つてゐる。このKaleの説は或意味に於ては正しい。そして又現代の印度にとつてその工業化と生産力の増大とが重要問題である事も疑ひない。乍併産業資本主義の弊害から現代の印度が免れてゐるか云ふと決してさうではない。賃銀労働者の貧困、家内工業、手工業の没落等々は印度固有の經濟體制の缺陷と結びついて事態を一そう悪化してゐる。Kaleもこの問題を見ないわけではないが、印度經濟の發展のためには避けがたいとするのである。「プロレタリアートの發生が望ましいかどうかを考へるのは重要な事柄である。併し當面の状態に於てはこの發展は不可避的である様に思はれる。」<sup>16)</sup>又彼は印度固有の家内工業を維持する必要を認めるが、資本と勞力の集中と機械的生産の利益は明かであり、産業資本主義の害悪を匡正する必要はあるが、又

15) Kale, *ibid.* p. 139.

16) Kale, *ibid.* p. 84.

「この國の國民は先進國の線に沿ふて最小の費用をもつて富の生産に努めざるを得ない。」<sup>17)</sup>とするのである。

かう云ふ主張の中に Kale 特有の立場と見解が窺はれる。其はある點で今日の印度の問題を正しく把握してゐると云へるが、問題の解決策として十九世紀以來歐米の歩んで來た同じ道を歩まうとするのは印度自身にとつて果して適切な方法であるかどうか疑はしい。

#### 四 印度經濟學の浪漫主義的傾向

吾々は既に Kale の印度經濟學の中に立ち上らうとする民族資本の慾求と合理主義的な傾向を見た。そして彼の意圖は大體ヨーロッパ資本發展の方式を印度に適用し、それによつて現代の印度經濟の問題を解決しようとするにあつた。併し果してこの方式を以て印度の問題を割切れるであらうか。印度の將來はヨーロッパの現在であるかと云ふ様な簡単な段階的なものゝ見方は成立し得ないし、又十九世紀の後進國獨乙の方策が現在の印度にそのまま適用されるとは考へられない。リストが獨乙に育成しようとしたものは若い純粹無垢の資本主義であつたが、現代の印度が迎へようとしてゐるものは様々の矛盾を露呈してゐるヨーロッパの資本主義である。加之斯様な資本主義を攝取する事に對して印度社會の内部の多くの因子が反撥するであらう。例へば印度に於ける急速な産業資本主義の勃興によつて没落しつゝある傳統的な手工業者の群はガンデーに指導されて所謂「サチャグラハ」なる精神運動を起してゐる。其他にも印度には歐米資本主義の唯物的傾向に對抗して民族的精神的文化を保存しようとする根強い運動が存在してゐる。従つて印度に歐米の資本主義が移植されたとしても、その成長は正常な

17) Kale, *ibid.* p. 121.

コースよりかなり偏重するであらうし、又印度經濟學の中には民族的産業資本の意欲以外に手工業者、労働者、農民、知識階級等々の非資本主義的、乃至反資本主義的欲求が相當にもり込まれる可能性が考へられるのである。斯様な傾向——こゝでは假りに印度經濟學の浪漫主義的傾向と呼ばう——を代表するものとして私は P. A. Wadia (G. N. Joshi との共著) の「印度の富」(The Wealth of India 1925) をあげよう。

Wadia の經濟學にはいくつかの基本的な前提が含まれてゐる。第一に彼によれば人間生活は有機的全體をなしてゐる。そして經濟生活は有機的全體と考へられる人間生活の中の不可分の一環をなしてゐる。従つて人間の經濟的動機なるものはそれ自體獨立して作用するものではなく、又物質的慾望を充足しようとする單一の經濟的動機によつて動く經濟人なるものは單なる抽象に過ぎない。同様にまた富と云ふ概念も外界の事物を支配する力としてではなく、人間生活へ方向に於て人間の福祉との關係に於てとらへられねばならない。

第二の前提は經濟生活の諸過程、即ち生産、分配、消費等も亦有機的全體をなしてゐると云ふ事である。富が人間の福祉との關係に於て考へられねばならぬと云ふ第一の前提よりして、富の生産も分配、消費より切離す事の出来ぬ概念である。分配と消費から遊離した生産それ自體の増大と云ふ様な事は無意義であり有害である。又逆に富の消費も單なる個人的問題ではなく、消費の状態如何は直に生産に影響を及ぼす點からして社會的な問題である。以上二つの前提の他に Wadia の主張の奥に潜んでゐる第三の前提があると思はれる。それは民族の經濟生活も亦一つの有機的全體であると云ふ思想である。即ち民族の經濟は一の獨立の經濟單位或は經濟體としてその内部に生産分配消費の過程を統一して居らねばならず、又農業、工業其他の産業を諷和的に含んでゐなければ

ならぬ。Wadia はこの三つの有機體概念を印度經濟の根底におくのである。

ところがこの有機的全體たる經濟生活は一般に歐米資本主義によつて破壊される。富は人間の福祉から、生産は消費から、工業は農業から切斷される。そしてこの有機體の破壊は資本主義の帝國主義的支配が根を下してゐる印度に於て最高度に達する。「英帝國の支配の世紀はその結果としてこの國に大英帝國の生活を特色づけてゐる經濟組織の或る基本的様相即ち資本主義をもたらず事となつた。……効用のためではなくて利潤のための生産、貨幣的尺度による福祉の測定、個人や團體の法律上の權利を保護するための規定、これらのものは外國の支配者の設立した政府の下にいよく力を増して來た。」<sup>18)</sup> 印度政府は投下資本の利益と有價證券の價格を守り國民の一そう大きな利益を無視して法律や軍事的權力を以て國內、國外の資本家の契約の神聖を維持しようとする秩序ある政府である事を自ら誇りとしてゐる。

Wadia によれば、かつて印度の經濟生活は貨幣的單位で測定された經濟的福祉とは全く異なる人間的福祉の理想によつて規律されて來た。事實また外國資本家の利益のために輸出されるルルビーの茶やコーヒーやマンガンや鐵礦の價值とこの國の貧民によつて消費されるルルビーの米や小麥の價值とは同様ではあり得ないのである。「吾國の思想家や政治的指導者は環境の影響力から抜け出て人間福祉の古い理想と貨殖を人生の最大事業と考へる事に對する蔑視の念とを印度に復活させるであらうか。それとも吾々はこの數百年間外國人によつて吾國に課せられた新しい生活状態を怠惰に受け入れ、福祉を犠牲として財貨を作り出す商業文明のために吾々の生命の血汐が吸盡されるのを許すであらうか。」<sup>19)</sup> これは印度經濟學に課せられた大きな問題である。

18) Wadia, The Wealth of India, p. 10.

19) Wadia, ibid. p. 11.

有機的全體としての印度經濟の破壊は農業と工業の分離、印度の單一農業國への轉落と云ふ事實に最も明かに現れてゐる。而も印度に與へられた農業は英國に食料及び原料を供するための耕作であるから、こゝにまた生産と消費の分裂と云ふ現象が起こる。實に「農業國」印度の住民は常に飢餓にさらされてゐるのである。

(註) こゝでは「農業國」印度が何を意味してゐるかを示すために *Maddala* より若干の統計を引用しよう。(前掲書、二二四頁—二二六頁)

年次	食用作物及非食用作物の耕作面積の發展				同指數
	食用作物	非食用作物	棉	及麻	
一九二一—一九三〇	八七〇〇〇 百萬エーカー	三〇〇〇〇 百萬エーカー		一一〇〇 百萬エーカー	八七〇〇〇 九〇〇〇〇
一九二〇—一九二九	九〇〇〇〇 百萬エーカー	三〇〇〇〇 百萬エーカー		一一〇〇 百萬エーカー	九〇〇〇〇 九二〇〇〇
一九一九—一九一九	九〇〇〇〇 百萬エーカー	三〇〇〇〇 百萬エーカー		一一〇〇 百萬エーカー	九〇〇〇〇 九二〇〇〇
一九一八—一九一九	九〇〇〇〇 百萬エーカー	三〇〇〇〇 百萬エーカー		一一〇〇 百萬エーカー	九〇〇〇〇 九二〇〇〇
一九一七—一九一九	九〇〇〇〇 百萬エーカー	三〇〇〇〇 百萬エーカー		一一〇〇 百萬エーカー	九〇〇〇〇 九二〇〇〇
一九一六—一九一九	九〇〇〇〇 百萬エーカー	三〇〇〇〇 百萬エーカー		一一〇〇 百萬エーカー	九〇〇〇〇 九二〇〇〇

  

年次	食用作物及非食用作物の生産と輸出の相對的增加を示す指數							
	米生産	米輸出	小麦生産	小麦輸出	棉生産	棉輸出	麻生産	麻輸出
一九二一—一九二七	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
一九二〇—一九二六	一〇五	一四一	一五三	一四〇	一七六	一四三	一三九	一三七
一九一九—一九一九	一〇〇	一四一	一五三	一四〇	一七六	一四三	一三九	一三七
一九一八—一九一九	一〇〇	一四一	一五三	一四〇	一七六	一四三	一三九	一三七
一九一七—一九一九	一〇〇	一四一	一五三	一四〇	一七六	一四三	一三九	一三七
一九一六—一九一九	一〇〇	一四一	一五三	一四〇	一七六	一四三	一三九	一三七

農産物の生産と並行して増大する輸出は何を意味するであらうか。それは支配者の自由貿易論よりすといよ／＼増大しつゝある「印度の富」を示し、印度がますます生産的剰餘を持つ様になつた事を意味する。勿論所謂「剰餘」は相對的觀念であつて個人に於てはその生活水準によつて規定される様に、一國の場合にはその經濟發展の段階によつて決定される。併し企業家が剰餘を獲得してゐるのに、労働者は賃銀を切下げられ、辛うじて飢餓線上に生存せしめられる事があり得る様に、又一國も外國政府の支配の下に産業的發展の機會を否定せられ、「剰餘」の輸出を強制される様な地位におかれる事があり得る。國民の正常な慾望が充足せられ健全な生活が維持されて後、始めて眞の剰餘を問題にする事が出来る。英國はその國民が冬期に火の氣なしに生活してゐるのに「剰餘」の石炭を輸出しはしないだらう。ところが英國の支配にある印度は斯様な意味の「剰餘」の輸出を強制されてゐるのである。かくて印度の農産物の輸出は飢餓輸出であり、所謂 economic drain を意味してゐる。併し又他の論者は「印度には食料が不足してゐるのではないが、一部の者はこれを買ふ事が出来ない位貧しいのである」と主張してゐる。併しもし食用農産物の強制的輸出がなかつたら、その價格はこの貧しい人口の購買力によつても購ひ得る程度に下落するであらう。要するに種々なる立場から印度の輸出を剰餘生産物の輸出として辯明しようと云ふ説は恰も「この國が自己の經濟政策を規制し得、剰餘生産物を自由に輸出し得る獨立の經濟單位であると云ふ假定」<sup>20)</sup>に基いてゐると云へよう。現實の印度經濟は不幸にして獨立の經濟單位でもなく有機體としての統一を保つてゐるものでもなす。

印度を斯様な現狀に陥れたのは、Wadia によれば歐米の諸國で盲目的に發展した「過度の工業化」(Over-

Industrialisation)である。このために工業國は必然的に原料や食料を工業國以外の未發達の國から求めねばならず、過剰に生産した工業製品を又この國以外に賣らねばならぬ。こゝに工業品と農産物との交換が行はれるが、これは平等な立場に立つた相互的な交換ではなく、工業國の立場よりする一方的な交換であり、必然的に農業國の隷屬化を來たすのである。そればかりでなく工業國相互の間でも市場獲得競争が激烈にたり戦争の危機が醸生される。そこで Wadia の主張は「過度の工業化」の匡正であり、農業と工業の均衡のとれた發展である。勿論過度に農業人口の増大した印度の立場から云へば、逆に將來工業化への拍車がかけれねばならないであらう。併しこの場合特に考へねばならない事は、この工業化を西歐的な方式によつて遂行するかどうかと云ふ事である。所謂印度工業化の代辯者達はヨーロッパの進んだ道に沿ふて傳統的な手工業や家内工業を革命的に機械的大量生産におきかへ、海外市場を目指して國際的な競争に入る事によつてのみ印度は救はれると主張する。Wadia は併しこの主張に對して強く反對する。

彼の謂ふところはかうである。もしも印度經濟の發展が國際市場で競争する能力にかゝつてゐるとすれば印度の將來は甚だ心細い。例へば企業經營や資金や技術の點から見て印度は恐らく日本と對抗出來ないだらう。更に一そう重大な事はこの方向への發展は歐米と同様な悲劇を印度も亦經驗する事になるだらうと云ふ事である。英國にランカンヤの綿製品を消費する事の出來ない英國人が多數見られ、佛蘭西にリヨンの絹製品を着ない佛蘭西人が多數に居る様に、歐米資本主義への追隨は印度の富と生産とを印度人の福祉から切離す結果になるだらう。「印度は國民的自滅の政策の盲目的な追隨者となる様な産業的膨脹を必要としない。よく均衡のとれた人口と職業の

配分に基礎をおくもつと健全な産業主義と云ふものがある。この産業主義に於ては利潤のためなら剩餘生産物を外國市場へ投資りせんとする様な劃一的機械製品の生産への熱病的な突進は存しない。それは先づ自國民の慾望を充足しようとする要求に基礎をおいてゐる。そしてもしも國際貿易が行はれるならば、それは他國を犠牲にして一國が利益すると云ふ貿易ではなく、關係國の相互的利益になる様な平等な關係に基いた貿易である。そしてその貿易は種々なる完成品の交換であつて、原料と完成品の交換ではない。<sup>21)</sup>「吾々はこゝで Wadia の第三の有機體概念、つまり有機體としての民族經濟の概念を一そう具體的にする事が出來た。彼によればこの有機體の中には農業と工業とが均衡を保つて含まれてゐるばかりでなく、斯様な有機體にして始めて大工場工業とならんで民族的手工業、家内工業をその固有の地位に保存する事が出來るのである。斯様にまづ第一次的に自給經濟——それは戰爭の恐怖に促されて成立した自給經濟ではない——を目的とする民族經濟の間でこそ眞の意味の剩餘生産物の交換があり、また平和な經濟關係が成立し得るのである。

以上の Wadia の主張は Kale の印度經濟學と對蹠的な地位に立つてゐる。殊に印度の工業化を西歐的な方式に沿ふて實現しようとする Kale の觀念の缺陷を指摘した點は甚だ示唆的である。又農業國と工業國との平等な自由貿易を考へる國際分業論のフィクションを打破つてこれを一そう現實的な基礎におかうとした點も又相當評價してよいと思ふ。但し Wadia の結論自體が現實的であつたかどうか疑問である。けだし彼の主張の基礎となつてゐる民族有機體の概念は十九世紀的民族國家の觀念と中世的自給經濟の觀念とをつきまぜたものであり、それは例へば現代の問題である廣域經濟の概念にまで展開されなければ現實の事態に對して適應性を缺くのではないかと思はれるからである。

21) Wadia, *ibid.* p. 408.



## 五 五 五 び

私は以上で印度經濟學の成立と現代印度經濟の實踐的方向を規定しようとしてゐる二つの傾向について述べた。最後に印度經濟學の方法論的基礎について問ふて見るならば、私の此の經濟學に關する乏しい知識の範圍内ではさう云ふ點についてまだ深い省察が行はれてゐるとは思はれない。Kale の印度經濟學の冒頭には若干これに相當する部分があるけれどもそれ程注目すべき主張も見當らない。例へばリストの説に従つて印度經濟學は國民的政治經濟學であると云ふが、他方で其は一般經濟科學の一部であつて何等新しい理論を形成するものでないと云ふ點を見ると、印度經濟學は單に「應用經濟學」(Applied Economics)としての存在意義しかない様であり、その國民的性格は一般經濟理論——それは即ち英國經濟學である——を印度經濟に適用する際に認められるものに過ぎない様である。吾々は Kale からこれ以上の事を明かにし得ないが、たゞこの程度の主張では經濟學の民族性に關する問題自體が果して把握されてゐるのかどうかさへも疑はしい。

一般に印度經濟學の特色は甚だ斷片的であり體系的でなく、數多くの經濟問題が羅列されてそのところ／＼に著者の政治的意見が散見せられると云ふ風である。印度人は經濟問題についていくばくの理論的反省をも重ねない中に突然めまぐるしい政治の舞臺に引出されたらしい。これまた經濟學の後進性のあらはれであるが、印度にとつては止むを得ないところであつたかも知れない。この點については Wadia 自身の言葉を借りて印度經濟學のために辯解しておこう。「多年の間哲學と神秘主義の傳統によつて飽和状態にあつた思想を今や突如として政治のゲームの中に奪ひ去られてしまつた様な國民に對してはある程度の容赦あつて然るべきである。」<sup>22)</sup>

22) Wadia, *ibid.* p. 117.